CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Meiji Repository (Meiji University Academic Repository)

＜記念講演＞

国際心を創り出す　―本と対話，文化交流を通じて平和とグローバル社会を推進する（1912-1954）―

スティーブン・ウィット
（訳：井上靖代）

明治大学図書館情報学研究会では，2019 年 6 月 22 日（土），明治大学駿河台キャンパスリバティタワーにおいて 2019 年度第 1 回例会を開催し，イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校准教授のスティーブン・ウィット氏による記念講演「国際心を創り出す：本と対話，文化交流を通じて平和とグローバル社会を推進する（1912-1954）」を行った（日本図書館文化史研究会との共催）。戦前期，図書館界における国際協力の枠組みについて，「国際心」をキーワードに考察する。

ウィット氏略歴：1995 年，イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校で図書館情報学修士課程を修了後，南イリノイ大学新潟校客員助教授，イリノイ・ウェスレヤン大学准教授などを歴任し，2011 年からイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校准教授。イリノイ大学で，2012 年から国際エリアスタディーズ図書館長，2016 年からグローバル・スタディーズ・センター長を兼務するほか，2018 年に博士号を取得した。2014 年から，国際図書館連盟（IFLA）の発行する『IFLA ジャーナル』の編集長も務める。

はじめに

本稿では，国際主義に重点をおく「国際心」形成のために，世界中で世論を変える目的でカーネギー国際平和財団と図書館間でのパートナーシップについて焦点をあてて述べる。

このプロジェクトは 1912 年に開始され，1952 年までに消滅していったものであり，様々な国際主義の時代と二つの世界大戦で残っていったものである。このプロジェクトは世界中に国際関係クラブの創設や，国際研究といった学術分野の発展，学術交流や教育的プログラムといった複数の会議の財政支援といった複数の方向にわたるものではあるが，本稿で私が基本的に焦点をあてるのは，米国の地方や五大陸の国内で創設され増加されていった図書館コレクションとしての国際心コーナー（International Mind Alcove）[1]についてである。

このコレクションはエリート層にのみ対象としたのではなく，学術的共同体，あるいは直接，国そのものに関わろうとする意図で構築された。米国における地方全体や，財団が様々な国際的プロジェクトで関わっている多くの国で，人々の認識に基づく行動を変化させようとの意図を持っていた。

この種のアドヴォカシーは，歴史研究者である入江昭[2]が説明するところの文化的国際主義，つまり，それは“学術研究共同活動を通じて，あるいは複数の国同士の理解を促進する努力を通じて，思想や人との交流を通じて国と人々とをつなげていくため行われる多様な活動”を包括するものとなる。文化的国際主義の核となるのは，平和を維持するのは教育と交流により生み出される文化的理解を有する人々が求めることであるという考えなのである。20 世紀初頭には，この新しい国際主義が“あらゆる国家や人々による，ある一定の関心をもち参加するグロー

2020 年 1 月 24 日受理
すてぃーぶん・うぃっと
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校准教授，
一橋大学客員研究員
いのうえ　やすよ　獨協大学教授

バル社会”というひろがりつつある認識に焦点をあてたものである。

1. 20 世紀初頭の国際主義

マルコ・デュランティ（Marco Duranti）が指摘しているように，“国際主義の言語は（第一次世界大戦前後では）文化的規範を尊重しない人々を除き，人々の国境を越えた社会境界の拡張を自制するためのメカニズムとして活用される”[3]。本稿では 1912 年からいわゆる新国際主義あるいは革新国際主義とよばれる第一次世界大戦前後の時期に国を超えて「国際心」を形成するため，カーネギー国際平和財団が努力した活動について焦点をあてるものである。

国際心のキャンペーンは北米や欧州，アジア，そして南米に国際主義を広めるために本を数多く配ることで行われた。国際平和を維持するための，国を超えての努力としての国際主義の役割は 20 世紀の歴史物語の中でますます重要となる側面である。

グレンダ・スルガ（Glenda Sluga）は，新国際主義とは愛国主義を形成する同じ政治的現実のなかにあるものの，明確に区別出来得るものとして説明している。スルガが述べているように，この国際主義形成はこの時代の社会的・政治的現代化の産物であり，“新しい国際的組織や新しい社交性のある国際的機構，それに「世論の力をさらに配慮する」ものを含む”[4]。国際主義は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて，戦争の脅威により活発化したものであるが，同時に，増大する経済統合や，“広がる情報認識を伴う世論の力や思想が国を超えて広がっていき，活性化したものでもあった”[5]。

このことは国際主義が，“リベラルで，国を愛し，反共産主義者”であり，“強力な西洋国家指導者や，中級階級の女性やフェミニスト，反植民地主義者，社会学者，そして道徳改革者”を包括しており，国際的な関心をもつ考え方を組織化したものだった[6]。

これらの国際主義者の活動前景と背景の双方において，大きな慈善団体が存在した。カーネギー国際平和財団は世界中の世論に影響を与えるためにユニークな幅広い努力をするところに傑出したものであった。カーネギー国際平和財団は，組織として「国際心」として言及されるものの発展と図書館所蔵資料やメディアを通じての知識の拡散をはかり，広く地球規模で到達することを目的とする学術的ネットワークで人々を受け入れようとした。

2. 国際心とは何か？

第一次世界大戦開戦 2 年前，ニコラス・マレイ・バトラー（Nicholas Murray Butler）は，『国際心：国際紛争の法的解決についての議論』[7]という薄い本を出版した。当時，コロンビア大学学長だったバトラーは，新しく創設されたカーネギー国際平和財団の仕事に深く関わっており，国際交流と教育部門のディレクターとして担当していた。これらの多様な立場と広範囲にわたる政治的かつ学術的なネットワークを通じて，バトラーは世界中の世論を変えようとする幅広い社会的試みを行う努力をし，また，“戦争のための法，大量殺人後の勝利を正当化するための平和，それらの強い力や残虐な軍事力の正当さと正当な理由付けの勝利”といったものにとって代わるだろう国際的な心を育成しようと啓蒙活動を行っていた。

財団の資源を活用して，バトラーは広く教育広報活動を始め，国際心を創り出そうとした。財団の教育部門業務の大部分は，世界の人々のあいだに国際心を創り出すことにあてられた。バトラーが主張したように，人々は“国際心を理解するべく教えられねばならないし，受け入れ，それにそって国の行動や政策を導いていかねばならない”。

これを受け入れるために，財団は国際法組織を発展すべく活動し，国が平和的にその相違点を調停していく機構を創設していった。活動の多くは情報宣伝活動にあてられた。財団は国際的な学術交流や図書館，そしてメディアを活用し，世界の人々が国家間の問題を平和的に解決すべく国際的な視野を持てるようにしようとするものであった。

例えば，1913 年までにカーネギー国際平和財団の職員は，バトラーによるモホンク湖（Lake Mohonk）会議[8]での講演をまとめた『国際心：国際紛争の法的解決についての議論』という 114 頁の冊子を広めようとしていた。財団では財源と十分な数のスタッフを準備し，この冊子を“選ばれた図書館と個人”に配り，フランス語とスペイン語に翻訳し配布した[9]。この年の中頃までに 2,200 冊が主な北米の国際法の教授や大統領顧問団，議会議員，州知事，アメリカ政治学学会やアメリカ経済学会，アメリカ国際法協会のすべてのメンバーに配られた。

他の研究者たちは，すぐにこの「国際心」という概念を受け入れた。J.A.ホブソン（J. A. Hobson）[10]

は, 1914 年に出版した図書『国際政府にむけて』で, 国際的な心を持つために必要な革命を提案し, “国際関係や経済, 社会学, 科学, 慈善的な組織網により, どこであっても国と国家の限界を超える関心と目的をもつコミュニティとリベラルな心で，試していける”ようにすることだとしている[11]。ホブソンは, “鉄道や配送，郵便，電報，財政的，ジャーナリズムの機構を統合したら，これらのコミュニケーションはさらに進展し，社会経済的政府が大きな構造となる”と捉えており，“民族や言語，小説の中の文化を統合していくだろうし，新しいアプローチを求めるやり方が相互に関連しあう”としていた[12]。

この「国際心」は明らかに西欧的な文明や文化, それに国際関係に関して一般的な見方や結果をもたらす啓蒙的な考え方の役割を反映していた[13]。したがって，国際主義や国際心は西欧の国々から生み出された文明社会の側面を含んでおり，西欧世界の範囲内で実現した平和的使節団を送りだすものであった[14]。財団は米国市民社会や西欧社会，それに世界中の人々に国際心のキャンペーンを起こそうと意図していた。バトラーは国際心に関する自分が書いたエッセイ集を，欧州やアジア，アフリカ，それに南北アメリカに住んでいる男性・女性の広く，さらに拡大しつつあるコミュニティに献呈しており，正義が国家間の違いを安定させる力の均衡をもたらす日が訪れるべく奮闘していたのである[15]。

2.1 国際心の心理的基礎

最初から，国際心の運動は，正しい本を読むことが認識の変化を導き，行動の変化をもたらすものだとの信念から行われていた。本質的には大規模で実行された知覚的セラピー方法であった。

欧州では，ベルギーでのドキュメンタリスト活動の指導者であった, アンリ・ラ・フォンテーヌ (Henri La Fontaine) [16]とポール・オトレ (Paul Otlet) [17]が世界の知識を組織化するために書誌を活用すると考え，国際主義と平和とを推進した[18]。1911 年 3 月にラ・フォンテーヌが国際的組織の事務局基金を探す際に, カーネギー財団からの基金を求めている。ベルギー国会議員という立場を利用して，ラ・フォンテーヌは「世界の安全平和は最高の法律である」というタイトルの短いエッセイを活用した[19]。ラ・フォンテーヌは無秩序な国際システムの問題点を概観し，“事実”と “組織”を使って説明して平和への流れを変えるための方法を提案した。ラ・フォンテーヌは “われわれは (平和) と矛盾する事実に反論しなければならないが，特に人々の間に存在している無秩序とみなしていることを否定する組織を創設しなければならない”。

ラ・フォンテーヌは“散在している”特別な団体の小さなグループが“処分されているような内在されている力を認識することができるし，その力は国際主義と呼ぶものである。それは平和をもたらすもっとも強い力である”として組織を創り上げることを推進した[20]。ラ・フォンテーヌがつかった言葉は, 著しくバトラーらが国際的意識を作りだそうとして使ったものと似ていた。

国際心といった概念の基礎をなすものの多くは, ジョージ・ミード (George Mead) [21]のいう自身を社会的に構築するための心理学的理論であり，国家の国際主義や文明に応用されたものであった[22]。ミードは自分が書いた論文「国際主義のための心理学的基礎」で軍国主義と愛国主義は, “広く心理的な問題であり，なぜなら対応の変更とならざるをえないものであり，社会のすべての国際的構造を受け入れようとする思いになるからである”[23] とする。国家としての社会的心理であり，かつ国際心を発展する活動を知らしめる地球規模での思想と知覚的変化に影響をもたらす力の両面での概念である。

この社会的試みは大規模で，人々が利己主義や自らの行動の変化を意識させようとするものとなった。そして，図書館と本を広めることが，このプロジェクトの中心となっていった。

2.2 国際心コーナー資料

平和を受け入れるために公共図書館を利用しようとする動きは，図書館専門職や平和活動団体の間で広まっていった。

ワシントン DC の公共図書館員だったジョージ・バウワーマン (George Bowerman) といった司書たちは，国際主義を通じて平和を推進するために, 図書館界を説得した[24]。1915 年初めには，カリフォルニア州バークレーで行われたアメリカ図書館協会大会で,「平和運動や似たようなプロパガンダのために図書館の支援をどのくらいおこなうべきか」としたエッセイを表明した。バウワーマンは，第一次世界大戦勃発後，平和をもたらすために，図書館が強く喧伝すべきかという自らの問いかけにこたえている。講演で，彼は特に図書館専門職は，カーネギー財団のような組織を強く支持し, 歓迎すべきであり,

平和を喧伝するため図書館プログラムや出版などを提案している。さらに，彼は図書館が国際力を推進するための図書をとりあげるべきだとしている。

2.3 国際心コーナーの初期の変化や発展，採用

1917年，ミネソタ州セント・ポール市のハミルトン（J. W. Hamilton）やニュー・ハンプシャー州のアンドーバーのマリー・チェイス（Mary Chase）は，小さな公共図書館で多様な国々の資料を発展させる支援を始めており，アメリカ図書館協会でのバウワーマンのよびかけに直接応じるものであった。チェイスは，“カーネギー国際平和財団は支援が続く限り，本を送る，それも無料で世界のどこへでも送ると約束してくれた”と報告している[25]。

カーネギー国際平和財団の初期の報告では，国際心コーナーの資料は非公式な図書館が主導的におこなうプログラムとして分類されている。1918年の年次報告で最初にふれられており，“図書館が国際心コーナーとして企画したものとして始めた図書館があり，国際関係や国際政治を扱う本のコレクションとして集めてきたものである。場合によっては，部門として図書館を支援して，こういったコーナーの選書をおこない，こういったコレクションの財源提供をおこなった”[26]。1年以内に，カーネギー国際平和財団は，“国際心コーナーと呼ばれるものを約100か所”設置するのを支援した。

このプログラムはニューハンプシャー州以外にも急速に拡大した。カーネギー国際平和財団は，米国内の地方の図書館に国際心コーナーの資料を送り，大きな図書館システムには財団とともに購入を促すため，国際心コーナー資料リストを提供した。このプログラムの急速な拡大は，図書館から広く支持されたことを示している。

2.4 国際心コレクションのネットワーク

図1の地図は，1946年1月3日時点で，米国内で国際心コーナーのコレクション（完成版と“未完成版”）の提供を示したものである。この地図は，当時のカーネギー国際平和財団理事長であるアルジャー・ヒス（Alger Hiss）[27]のために，前国際連盟（LN）司書で，財団職員であったフローレンス・ウィルソン（Florence Wilson）[28]が手書きで説明を書き込んだものである。1946年までに，国際心コレクションは米国全体の地域に広がっていったことを明らかにしている[29]。

図1　コレクション提供先

このプログラム開始時には，カーネギー財団の相互教育部門での助手であったエイミー・ヘミンウェイ・ジョーンズ（Amy Heminway Jones）が国際心コーナーの図書リストを作成し，この財団の仕事の推進目的で広く旅行して回っていた。ジョーンズはこの仕事のまとめ役や助手といった以上の存在であった。彼女は世界中の司書たちと広く文通して，国際的交流を推し進め，国際心コーナーのコレクションによって関係するネットワークを形成していった。

ジョーンズの手紙は，米国の地方やアジア，アメリカ大陸，欧州に及び，彼女のユーモアや強い思いを通じて司書たちの間に仲間意識を育てながら，図書配送を行っていった。オレゴン州のベンドに住んでいる司書が，国際心コーナーが読者を驚かせるかもしれないと心配すると，ジョーンズは「他の人々の暮らしはどうなっているのだろうか」とか「旅をしてみたいですか」といった他のネーミングを提案している[30]。

また，ジョーンズは国際心コーナーと連動している国際関係クラブ活動の両方を支援するため広く旅行している。彼女は列車で米国内にある国際心コーナーを回り，ワークショップを開催し，図書館理事会で説明し，司書たちと会議を行っている。ノースダコタ州やジョージア州，インディアナ州，ウィスコンシン州，ネブラスカ州，ミズーリ州，コロラド州，オレゴン州，そして東部の北から南へと訪れている。さらに欧州へ蒸気船で旅をし，アジアや日本を訪問し，中国やオーストラリアまで旅行している。ジョーンズの旅の記録『優しい冒険』は1933年に出版されている[31]。

3. 国際的な世論

図書コレクションが世界中に送られることは，米国市民のものの見方を国際化する努力であり，カーネギー国際平和財団が描く国際主義の夢を国外に広めるといったことが当初からの国際的な目的でもあった。米国内でこのプログラムが行われる際には，カーネギー国際平和財団は英国やスコットランド，ウェールズ，カナダ，オーストラリア，南アフリカ，インド，ニュージーランド，そして日本の図書館を選び出し，図書コレクションを提供したのである。短期間に，国際心コーナーはカーネギー財団相互教育部門の主たる手段のひとつとなり，財政基盤を定期的に申請し，それからの 24 年間にわたり，年次報告書に記載されるようになった。カーネギー国際平和財団ではこのプログラムを，“国際理解と国際関係に関連するすべてにおいて，指示的な世論を形成し，新規活動や新規方針を議論する際に知的理解の背景として提供するために，この部門が思い通りに行う，まさに力をもつ担当のひとつである”[32]としている。

カーネギー国際平和財団が国際主義を推進するのは，米国の海外政策に関しての幅広い議論の一環であり，人々が議論する基盤となる役割となっているからである。そもそもこのプログラムを始めることは，米国の国際連盟参加についてカーネギー国際平和財団の国際主義者たちが，使命として実行していくことであり，明らかに国際問題から孤立化し不干渉であろうとする米国の優勢な感情に反するものであった。第二次世界大戦勃発直後の時期とは異なり，米国政府は文化外交に関与していなかったし，あるいは国際的になにか関わることを海外における政策や存在を支持する手段としてみなしていなかった。したがって，こういったプログラムを図書館司書たちがアドヴォカシーとすることは，国内外の政策につながる国内の声と反していたのである。この国際心コーナーについての初期の批判は，カーネギー国際平和財団が米国を国際連盟に引き入れようとするものだというものであった。ある記事ではこの国際心コーナーを，“アメリカ主義に反する国際主義を議論させるものであり，‥‥これらの活動は海外向けプロパガンダの格付けの下で行われるべきである。財団の目的は，時期を尊重される米国政策を破壊するものである”[33]としている。

3.1 国際心を国外へ

カーネギー国際平和財団の国際心コーナーのプログラム計画は，米国の国内議論に影響を与えようと意図していたこと以上に，かなり大きくなっていた。1924 年までに，国際心コーナーは米国内で 81 か所，他国では 22 か所のプログラムに広がっていた。始めから，カーネギー国際平和財団は米国内と海外とで，同時にプログラムを発展させ推進していき，同じようなやり方で行って同じような結果，つまり世界中の世論を変化させることを熱望していた。このねらいを達成するために，カーネギー国際平和財団は，このプログラムを勧めるために海外へ図書館司書たちを派遣したのである。

1927 年に，カーネギー国際平和財団は，前国際連盟の図書館司書であり，パリにある図書館学校の講師であったフローレンス・ウィルソンを中近東にある米国の教育学校に調査のため派遣した。エジプトやシリア，トルコ，ギリシャを旅行し，ウィルソンはこの地域における図書館の運営管理のコンサルティングをおこない，国際関係クラブや国際心コーナーといったカーネギー国際平和財団のプログラムの可能性について評価をおこなった。これらの訪問では，カイロ・アメリカン大学といった規模のものから小規模の宣教師が建てた学校までも，評価してまわった。米国の地方の公共図書館が参加していたように，中近東の学校では，読者たちが国際関係や政治科学や歴史，国際事例についての図書館資料に関心を示した。

その報告書のなかで，ウィルソンは国際心コーナーは，中近東の人々の発展に貢献できるだろうし，“専制的な支配者による制限や外国政府の支配を抑え，教育的設備なしには，ここの人々の新しい民主主義の準備として，どちらかというと暴力的な愛国主義と戦い，国際的な出来事を知る必要がある”としている[34]。カーネギー国際平和財団の米国外で広く受け入れつつある必要な解決策は，米国の地方での発展とよく似ており，国際心コーナーに図書コレクションを配布して広めることで，文化的な出来事や国際的な実践についてお互いに知ることとなって解決していこうとするものである。海外における図書コレクションは，明らかに英語を知っており，教育を受けることが出来る知識階級向けであったのだが，コーナーは米国内と海外で，進行中のグローバル社会に関わり，参加するための心づもりとなるための知的基礎としてみなされたのであった。

バトラーが 1927 年に成人教育活動として報告したように，“偉大な図書館にある情報源や世界中の史資料は開かれており，学術研究の共同的な努力により利用できるようになった。公共図書館と読書室や国際心コーナー，国際関係クラブは力強くなりつつあり，一つの土地だけにもたらされているのではなく，多くの土地で行われており，人々の心は，力ある最後のリゾート地での現代的な民主主義であり，開かれ，さらに広められ，深化し，すべての国際理解と国際協力を関連づけるものとなっているだろう”[35]。図書コレクションは新しいコスモポリタンの世界観を推進していくための戦略のひとつとなっていたのである。

3.2 国際心コーナーの資料内容

1918年からほぼ50年にわたり，1909年から1946年にかけて出版された350冊の成人向け図書と250冊の児童向け図書が国際心コーナー資料として配布された。

これらの図書は，人々に国際連盟と国際連合の両方について紹介するものであり，さらに文化や経済，それに国際関係について，よりよく理解してもらおうとするものである。

表１　一橋大学における頻出件名標目

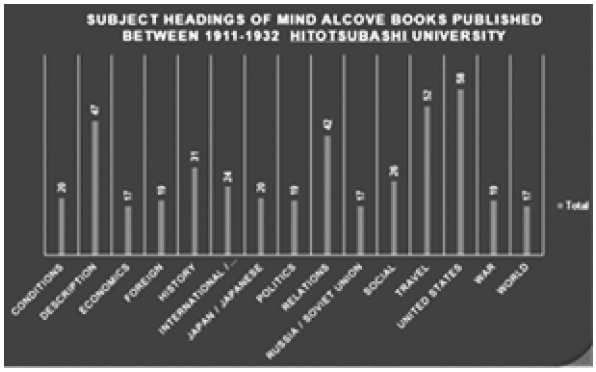

表１は一橋大学が所蔵している158冊の国際心コーナーのコレクションにつけられている件名標目でもっとも頻繁にでてくるものを示したものである。カーネギー国際平和財団とのやりとりでは，同じタイトルの図書が北米と南米，それにアジアの国際心コーナーに送られており，欧州と中近東には別の配布リストが作成されたことがわかっている。

件名標目をみると，これらの図書は，様々な国についての描写や旅行記，国家間の国際的政治的の関係，国際経済について広く焦点をあてたものであることが明らかである。興味深いことに，国として最も頻繁に述べられ議論されているのは，米国や日本それにロシアである。米国についてのタイトルの多くは，米国の海外における役割についてであり，他国との関係や中立について疑問を呈するものである。日本についての図書については，文化や経済，非軍備，それに日本人移民について焦点をあてている。移民に関しては，一般的にカリフォルニア州における日本人移民について前向きな側面を呈しており，当時，多くの米国で定着していたアジア人移民の否定的なイメージとは異なっている。これらの図書の中には，日本人研究者やジャーナリストによって執筆された図書も含まれている。日本人の著者以外では，欧州人や米国人ではない著者によるものは，これらの図書コレクションにはほとんど含まれていない。

3.3 日本における国際心コーナー

「国際心」という表現は，日本の YMCA の刊行雑誌である『開拓者』に，1916 年という早い時期に日本語で登場している[36]。この言葉は，急速に日本語となっていき，日本の国際関係や国際的な出来事での注目される役割の是非を議論する際の表現として頻繁に使われるようになっていった。

明らかに，日本はカーネギー国際平和財団の国際化と平和を構築する努力の重要な側面を担っていたのである。財団は，前ハーバード大学学長であるチャールズ・エリオット（Charles Eliot）を含む人々を，重要な使節団として，1912 年に日本に派遣しており，将来的活動の基盤として，例えば東京市立日比谷図書館といったところにプロジェクトを立ち上げる支援をした[37]。カーネギー国際平和財団は，1912 年に「特別特使」として日本人法律家・宮岡恒次郎[38]を採用し，日本における活動支援と国際主義の成果の報告を提出させている。1918 年 8 月，東京商科大学（Tokyo Commerce University）（現・一橋大学）が最初の国際心コーナーの図書を受け取っており，そのなかにはニコラス・マレー・バトラーが執筆した『永続すべき平和の基礎』[39]含まれており，すぐに早稲田大学学長の監修のもと日本語に翻訳された。

日本におけるこれらの図書コレクションの受け入れや，どのように読者に刺激をあたえたか，関わる研究者たちのネットワークはどうであったか，国際心についてどのように話し合いがあったのかを，私

の現在の研究テーマとしている。ねらいとしては，東京市立日比谷図書館に寄贈されたカーネギー国際平和財団の図書を調査した吉田昭子氏のような研究者の仕事[40]の上にさらに積み重ねていくことにある。

先述したとおり，1918 年まで現在の一橋大学は国際心コーナーのプログラムに参加していた。日本で参加しているところのリストには，ほかに日本のアメリカン・スクールや姫路女学校，東京市立日比谷図書館が含まれている。残念なことに，国際心コーナーについてのわかりやすいリストはなく，アーカイブとしての記録を通じて，一つにまとめ上げることが出来る程度である。

カーネギー国際平和財団のアーカイブ内には，日本の図書館司書たちとのやりとりが残されている。例えば，東京商科大学の図書館員であった太田為三郎とエイミー・ジョーンズとの間でかわされたいくつかの書簡である[41]。ここに示しているように，1924 年 4 月 22 日に，太田はその年に成立した移民法に不満を表明し，米国へむかうアジア人移民の効果的な排斥を狙うものだとし，日本において国際主義を広めるのに困難な事態を招くだろうとしている。ジョーンズはそれに賛成し，移民法は不公平な法律であり，自分と太田氏は“この事例について真摯に，かつ率直に書いている”ことはとにもかくにも喜ばしいことだと述べている。

私はこのコレクションについてさらに広く書簡のやりとりや記録を見つけ出そうとしており，日本語の文献の中で，これらのコレクションについてさらに詳しく記録した写真などがあればよいかと思っている。

3.4 日本における国際関係クラブ

国際関係クラブは，同じように日本で取り入れられたものである。国際関係クラブは，世界中の大学キャンパスで設立された。1926 年までに，米国では 100 を超えるこういったクラブがあり，1930 年初頭までに日本では 9 のクラブ[42]があり，さらに朝鮮と中国にもあった。これらのクラブ活動を通じて，カーネギー国際平和財団は，シラバスや図書，それに講演を提供して，学生や教員が国際的に重要なテーマについて議論できるようにした。

国際心コーナーと同じく，国際関係クラブは日本についてかなり焦点をあてたものとなっており，米国と日本との間の理解と関係を改善することを意図した多くの図書をも含んでいた。コーナーと同じように，日本の研究者たちはコロンビア大学や早稲田大学とコネクションをもつ著者たちが書いた読書リストを持っており，そのコネクションは米国で博士課程を修了した日本人研究者たちのネットワークでもあった。

国際心コーナーの図書コレクションとともに，日本におけるこれらのクラブ活動の実態と影響についてさらなる資料を探している。

4. 政治的論争

アメリカ人として考えるなら，国際心コーナーといったプログラムは明確に成功といえるだろうが，国際主義は愛国主義にとって代わるかもしれないと心配する人々からは批判を受けるものでもあった。

図 2　政治的論争

テキサス州ハリンゲンでは，公共図書館理事会で，“もっとアメリカ的な図書”が必要だとの議論があったという記事があり，また，“国際心コーナーの図書コレクションは人気があるという興味深い報告”があるとも記載されている。

アメリカ第一主義と国際主義とを並列にすることは，マサチューセッツ州選出議員であるジョージ・ティンカム（George Tinkham）による議会での演説[43]に強く主張されていることであり，彼は“一般的な人々を代表しているわけではない情報源からの世論を巧妙に操作することは，アメリカ的共和制を腐敗させる毒杯となるだろう”と警告していた。彼の議会における演説は，後に新聞で報道され[44]，ティンカムは，特に国際心コーナーはカーネギー国際平和財団による小細工の一つであり，図書館に置かれているこれらの図書コレクションには“子ども向

けでさえ”ある本もあると述べている。

4.1 第二次世界大戦からユネスコへ

国際心コーナーの図書コレクションは，進化し続けており，米国が第二次世界大戦に関わっていくように，さらにほかの目的へ変化していった。戦争に対して国際的に対抗することへのねらいへと動いていきつつ，国際心コーナーはカーネギー国際平和財団が武力に対抗する戦いを考える者を支持することから世界的な使命へとその強調する点が移っていった。つまり，欧州におけるファシズムや，アジアや太平洋地域における日本の帝国主義の拡大に対抗するものとなっていったのである。米国内での移行では，カーネギー国際平和財団は，国際心コーナーの図書コレクションがもつ，米国内での人種的寛容性を形成するための可能性にハイライトを当て始めたのである。

戦争が終結すると，カーネギー国際平和財団は，国際連合を強化することを優先していくための戦後の努力に焦点を当てていった。国際心コーナーの図書リストは，シグリッド・アルネ（Sigrid Arne）が執筆した国連入門書[45]といった資料を含み始め，カーネギー国際平和財団は，1946 年の報告書で，1944 年以降，新規にコーナーは設置されておらず，1951 年には，図書館に設置するこのコーナーの目的はすべて達成するだろうとしている。

4.2 国際心コーナーと冷戦 ―1954 年―

1952 年になると，米国議会は，課税免除団体がその基金を国としての利害に反するような活動を支持するようなことに使っていないかどうか調査し始めた。コックス委員会[46]やリース委員会の名のもとに 1952-1954 年にヒヤリングが行われ，“十分かつ完全な調査と教育的研究がおこなわれ，･･･連邦政府から収入に関して課税免除されている財団やその他の組織が，その目的のために設定された資源を目的外に使っていないかどうかが決定され，特にその財団や団体が反米的で破壊的活動，つまり政治的目的や，プロパガンダ，立法化に影響を与えるとする活動に，その資源を使っていないかどうかを決めるために調査を”行ったのである[47]。『シカゴ・デイリー・トリビューン』紙は，“この国のかなり大きな財団が国際コミューンなどを含むグローバリズムのプロパガンダに転用されている”と社説で報じている[48]。一方，『ニューヨーク・タイムズ』紙は，この委員会の調査を“行間に半分隠されている学術や研究，思想の自由への危機”であると社説で論じている[49]。

1954 年，この委員会はノースウェスタン大学の政治学教授ケネス・コールグローヴ（Kenneth Colegrove）[50]に依頼して，1918 年から 1947 年に出版されて，カーネギー国際平和財団が配っていた図書のリストを評価させたのである。コールグローヴはこれらの図書を“国益に反するし，極右に偏りがちである”とした。パール・バックが書いた『大地』[51]は，“やや右よりである”とし，ほかのタイトルでは“グローバリスト”であり，“マルクス派”であると分類した。

コールグローヴは，カーネギー国際平和財団が配った図書は，国益を推し進めない見方を表現していると結論づけた。

まとめ

国際主義と 20 世紀初頭のグローバル化の歴史のなかでの図書館と専門職の役割とは，以下の 3 点である。

- 新しい世界主義的な規範を擁立する支援
- 国家を超えたネットワーク
- “国際政策”を喧伝しようとする国家的力の迂回

不明確な点も残る。

- プロパガンダ活動としての受け身的なパイプとしての図書館の別の例なのか？
- 図書館と財団との関係は何だったのか？

国際心コーナーの 40 年間にわたる活動は，20 世紀初頭の国際主義とグローバル化の歴史の中で，図書館と情報の役割に光を当てるものである。

図書館は「国際心」キャンペーンの中心的役割をはたし，入江氏が示した文化的国際主義を推進する専門職の能力を示すものであり，20 世紀初頭の地球規模での情報ネットワークを発展させる支援となっていた。

このプログラムの地球規模での本質と，米国国内や欧州，中近東，南北アフリカ，アジア，南米を通じて文化の広範囲な方向性を超えていこうとするものであり，進みゆく世界社会を発展させていく志向でもあった。カーネギー国際平和財団とパートナーとなった図書館は，国境を越えてのパラダイムの枠内で，米国内や欧州，アジア，そして世界各地域で

の同じように国際的戦争が引き起こす問題を診断し，治療していこうとする活動を行っていたのである。

［編集注：本講演は，Witt Steven W., “International Mind Alcoves: The Carnegie Endowment for International Peace, Libraries, and the Struggle for Global Public Opinion, 1917-54, ” *Library & Information History*, 30, 2014, pp. 273-290. の内容などを踏まえ，日本での研究成果を取り入れてまとめられたものである］

訳注および引用文献

1) 訳注：直訳だとアルコーブだが，馴染みがないのでここではコーナーと訳しておく。

2) Iriye, A. *Cultural Internationalism and World Order*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1997, p.3.（邦訳：入江昭『権力政治を超えて：文化国際主義と世界秩序』篠原初枝訳　東京：岩波書店, 1998, 237p.）
Iriye, A. *Global Community: The Role of International Organizations in the Making of the Contemporary World*, Berkeley：University of California Press, 2002, p.18.（邦訳：入江昭『グローバル・コミュニティ：国際機関・NGOがつくる世界』篠原初枝訳　東京：早稲田大学出版部, 2006, 250p.）
訳注：入江昭（1934～）日本出身の国際政治学者。ハーバード大学名誉教授。

3) Duranti, Marco. “European Integration, Human rights, and Romantic Internationalism” In Doumanis, N. ed., *The Oxford Handbook of European History 1914-1945*. Oxford；Oxford University Press, 2016, p.442.
訳注；Marco Duranti シドニー大学教授，専門は欧州史・国際史。

4) Sluga, Glenda. *Internationalism in the Age of Nationalism*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2013, p.2.
訳注：Sluga, Glenda シドニー大学教授，専門は国際史。

5) 前掲 4)

6) 前掲 4), p.5.

7) Butler, Nicholas Murray. *International Mind: an argument for the judicial settlement of international disputes*, New York: Charles Scribner’s Sons, 1912, 121p.
訳注：Nicholas Murray Butler（1862-1947）哲学者，コロンビア大学（N.Y.）総長（1902-1945）。1931 年ノーベル平和賞受賞。

8) 訳注：Quaker 教徒である Albert K. Smiley 氏が所有していたニューヨーク州 Ulster County にある Mohonk Mountain House で 1895 年から 1916 年にかけて国際紛争仲介をテーマとして開催した Lake Mohonk Conference on International Arbitration のことをさす。Cecilie Reid. *American Internationalism：Peace advocacy and international relations, 1895-1916*, Boston college,　PhD. dissertation, 2005.に詳しい。

9) Carnegie Endowment for International Peace. *Minutes of the meetings of the Board of Trustees, 1912-1914.,* 1914.

10) 訳注：John Atkinson Hobson(1858-1940)　イギリスの経済学者・社会学者。『帝国主義論（Imperialism）』（1902）はレーニンに影響を与えたといわれる。

11) Hobson, J. A. *Towards international government*. New York: Macmillan, 1914, p.191.

12) 前掲 13), p.192.

13) Curti, Merle E. *American Philanthropy Abroad*, New York: Transaction Publishers, 1963, 651p.; Rietzler, Katharina.“Experts for Peace Structures and motivations of philanthropic internationalism in the years.” In Laqua, Daniel ed. *Internationalism reconfigured: transnational idea and movements between the world wars*. London: I.B.Tauris, 2011, 255p.; Weber, Peter C.“The Pacifism of Andrew Carnegie and Edwin Ginn: the Emergence of a Philanthropic Internationalism,” *Global Society*, 29(4), 2015, pp.530-550.

14) 前掲 13) Weber.

15) 前掲 13) Curti, p.1.

16) 訳注：Henri-Marie La Fontaine（1854-1943）ブリュセッル自由大学国際法教授，1913 年ノーベル平和賞受賞。国際書誌学研究所（国際情報ドキュメンテーション連盟）設立。

17) 訳注：Paul Otlet（1868-1944）国際十進分類法（UDC）発案者。情報学者。1907 年国際学会中央事務局（現・国際学会連合（UIA））をラ・フォンテーヌとともに設立。

18) Rayward, W. B. “Knowledge organization and a new world policy: the rise and fall and rise of the ideas of Paul Otlet,” *Transnational Associations*, 55(1-2), 2013, pp.4-15.

19) La Fontaine, H. *Salus Mundi Suprema Lex*. Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Offices, [1911,] p.1. *Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Offices Records, 1910-1954.*, Volume 35(4078585). Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia University Libraries.

20) 前掲 19), p.2.

21) 訳注；George Herbert Mead（1863-1931）米国社会心理学者・哲学者。

22) Fischer, M. “Mead and the international mind,” *Transactions of the Charles S. Peirce Society: A Quarterly Journal in American Philosophy*, 44(3), 2008, pp.508-531.

23) Mead, George H. “The psychological bases of internationalism,” *Survey*, 23, 1924, pp.604-607.

24) Bowerman, G.F. “How Far Should the Library Aid the Peace Movement and Similar Propaganda?” *Bulletin of the American Library Association*, 9, 1915, pp.129-133.

25) Advocate for Peace. Among the Peace Organizations. *The Advocate of Peace*, 80(2), 1918, pp.62-63.

26) Carnegie Endowment for International Peace. *Annual Report—Carnegie Endowment for International Peace*, New York: Carnegie Endowment for International Peace, 1918, p.76.

27) 訳注：Alger Hiss（1904-1996）　弁護士，米国政府高官。1946 年から 1949 年にかけてカーネギー国際平和財団理事長を務める。のち下院非米活動委員会に査問される。

28) 訳注；Mary Florence Wilson（1884-1977）　コロンビア大学図書館員として勤務後，1919 年から 1926 年まで国連図書館司書として働く。1927-1929 年にカーネギー平和財団で上級コンサルタントとして国際交流活動に携わる。著書に，*The Origins of the League Covenant: documentary history of its drafting*, London: Leonard and Virginia Woolf, 1928, 260p. がある。

29) Wilson, F. *Memorandum Concerning International*

Mind Alcoves, 1948. *Carnegie Endowment for International Peace European Center Records, 1911-1940.* Box 47.4, Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia University Libraries.

30) *Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Offices Records, 1910-1954.* Box 306, 1926-1946. Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia University Libraries.

31) Jones, Amy Heminway. *An Amiable Adventure*, New York : The Macmillan company, 1933, 162p.

32) Carnegie Endowment for International Peace. *Annual Report – Carnegie Endowment for International Peace*, New York: Carnegie Endowment for International Peace, 1927, p.27.

33) Gen. Herrmann Storms Library; Seizes 4 Books. *Chicago Daily Tribune*. October 27, 1927.

34) Wilson, Florence A. *Near East educational survey; Report of a survey made during the months of April, May, and June 1927.* London: Hogarth, 1928, p.15.

35) 前掲 32), p.27.

36) 新渡戸稲造「国際心」『開拓者』11(1), 1916. 1, pp. 6-10. 参照：国会図書館サーチ (https://iss.ndl.go.jp/books/R100000039-I002279128-00) (last accessed 2019-5-17)

37) Carnegie Endowment for International Peace. Division of Intercourse and Education. 1914. Publication. *Some Roads Towards Peace: A Report to the Trustees of the Endowment on Observations Made in China and Japan in 1912 by Charles W. Eliot.* New York: The Carnegie Endowment for International Peace. (http://hdl.handle.net/2027/pst.000001615715) (last accessed 2019-5-17)

38) Miyaoka, Tsunejiro. *Growth of Internationalism in Japan*, Washington, D.C.: The Endowment, 1915, 15p. 訳注；宮岡恒次郎（1865-1943）東大法学部卒業後，外務省入省。退官後は弁護士。東京ロータリークラブ創立メンバー。ウィリアム・モースやパーシヴァル・ローウェル，フェノロサらと親交があった。

39) *The basis of durable peace*, written at the invitation of the New York Times, by Cosmos. New York : Charles & Scribner's Sons, 1917. "These papers were originally printed in the New York Times of November 20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 30, and December 2, 4, 6, 9, 12, 15, and 18, 1916." --Publisher 's note　訳注；コスモス『永続すべき平和の基礎』煙山専太郎訳，塩沢昌貞校訂，早稲田大学出版部, 1917, 217p. 煙山専太郎(1877-1954)は早稲田大学教授。ロシア史・政治学者。塩沢昌貞(1870-1945)は当時の早稲田大学学長。米国・ドイツに留学した経済学者であり，国際連盟会議日本代表として参加。

40) 吉田昭子「東京市立日比谷と図書館カーネギー国際平和財団文庫－その寄贈経緯と概要」池谷のぞみ［ほか］編著『図書館は市民と本・情報をむすぶ』東京：勁草書房, 2015 , pp.69-77.

41) Ota, T. (1924, April 22). Letter from Ota to Jones, April, 22, 1924. *Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Office records, 1910-1954.* Box 306, International Alcoves, 1919-1925. Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia University Libraries., Jones, A.H. (1924, May 15). Letter from Jones to Ota, May, 15, 1924. 同 Box 306. 訳注：太田為三郎（1864-1936）　帝国図書館，台湾総督府図書館勤務後，東京商科大学（現・一橋大学）図書館長。日本図書館協会会長なども務める。

42) 訳注；9つのクラブは以下の学校にあった。桐生高等工業学校，神戸高等商業学校，同志社大学，慶応義塾大学，拓殖大学，東京外国語学校，東京府立高等学校，早稲田大学，関東学院(横浜)

43) "Rotarian make gift to library," *Heraldo de Brownsville*, October 16, 1938. p.5.

44) Tinkham, G. H. 'Nicholas Murray Butler's Attitude 'Seditious'. *Milwaukee Sentinel*, February 26, 1933.

45) Arne, Sigrid. *United Nation Primer*, Rev. ed., New York: Rinehart, 1948, 266p.

46) 訳注；Select Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations and Comparable Organizations は，1952-1954 年に，米国下院に設置された委員会。委員長の名前をとってコックス委員会およびリース委員会とよばれる。しかし，上院に設置されたマッカーシー委員会の影に隠れて，その報告書の影響力は強くはなかったといわれる。

47) US Congress. House. Special Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations. *Tax-exempt foundation. Report of the Special Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations and Comparable Organizations*, 1954. House of Representatives Eighty-third Congress second session on H. Res. 217. 83rd Congress. US Government Printing Office.
US Congress. House. Special Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations. *Tax-exempt Foundations: Hearings before the Special Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations and Comparable Organizations*, 1954. 83rd Congress. US Government Printing Office, p.1.

48) Fulton, W. "Foundations Wander into Fields of Isms," *Chicago Daily Tribune*, October 15, 1951, p.1.

49) Foundation Inquiry. *The New York Times,* December 11, 1952.

50) 訳注：Colegrove, Kenneth W.（1886-1975）ノースウェスタン大学教員。国際政治学者。著書に，"Parliamentary Government in Japan, " *American Political Science Review*, 21(4), 1927. 11, pp. 835-852. *Militarism in Japan.* World Peace Foundation, 1936, 77p. などがある。1946 年 3 月に日本国憲法策定顧問として来日。『ニューヨーク・タイムズ』紙は右翼政治学者として死亡記事を掲載している。"Prof. Kenneth Colegrove Dies; Right-Wing Political Scientist," *New York Times*, January 4, 1975.
参考：国会図書館　日本国憲法の誕生　4-7　コールグローヴ，トルーマン宛書簡 1946 年 7 月 29 日 https://ndl.go.jp/constitution/shiryo/04/124shoshi.html (last accessed 2019-12-9)

51) 訳注：Buck , Pearl S. *The Good Earth.* London: Methuen & Co., 1931, 339p. パアル・バック.『大地：長編小説』新居格訳，東京：第一書房, 1935, 363p.　続編の『息子たち』『分裂せる家』とあわせて 3 部作。中国を舞台とし，貧農の主人公は地主の娘と結婚して豊かになるが，美しくない妻が疎ましくなり，愛人のところへ出入りしているうちに洪水などが起こり没落していく。知的障害のある娘を溺愛して，行く末を案じる主人公をとりまく家族の話。作者は 1938 年にノーベル文学賞を受賞。